気根的路線集落

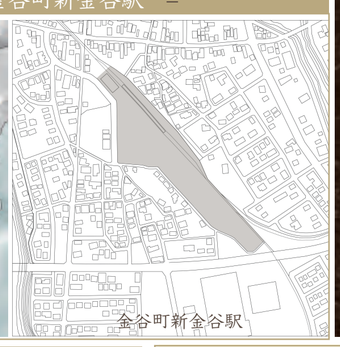
– 鐵道によりヒトとモノが循環する交換経済圏と大井川モデル –

00. コンセプト – 路線を利用した大井川流域の生活 –

新金谷駅（有形文化財）

静岡県島田市金谷町には、動態保存の SL が存在する。私自身、子供の頃からお世話になっている新金谷駅だ。休日は子供を連れた多くの家族が訪れ、方向転換する SL に転車台を囲む風景が見られる。そのため敷地のほとんどは駐車場であり、加速する SL の観光資源化に、沿線住民との関係が粗末なものになっているのではないかと考える。そこで、心の側にある鐵道とこれからの流域暮らしを提案する。

01. 敷地 – 静岡県島田市金谷町新金谷駅 –



02. 大井川鐵道

– 輸送目的→移動手段→観光資源化？ –

電源開発や森林資源の輸送目的であった鐵道は、現在移動手段に変転し機関車トーマスが走る路線へ

大井川流域と大井川本線　（右図：旅行目的）

- 計画地（新金谷駅）は、大井川沿いに位置している
- SL の起点が新金谷駅（南）、終点は千頭駅（北）
- 点在する集落を結ぶように敷設された大井川本線は、1 集落 1 駅的な互いに強い関係性を持っている
- 昔は上流と下流とでヒトとモノとが行き来していた
- 流域の少子高齢化、働き手と移動手段が減少している

03. 大井川流域と旧東海道金谷宿 – 流域としての一体感 –

勝手越し

幕府直轄の五街道の中でも、東海道は特に重要な街道だった。
大井川だけはどんなに浅い時も「勝手越し」は許されなかった。

川止め

川止めによる滞在期間が長くなる金谷宿は、東から西へ、西から東へ向かう人々にとって、格好の文化交流の舞台となった。

→

リサーチを通してわかったことは、

1. 気根的路線集落な現像

（大井川流域に現れている集落の発生と大井川路線の関係性）

2. 混同する文化形態

（江戸時代から現代までの大井川流域の文化形成の姿）

→

04. 将来の流域と鐵道に向けて – 既存や現像から環境を生み出す –

1. 鐵道が沿線住民にとって移動手段としての役割を果たせてない
2. 黒字へ押し上げたプロジェクト「きかんしゃトーマス」の版権
3. 後期高齢者の生活範囲（免許規制強化による移動手段の減少）
4. 普通電車のダイヤを改正、観光資源としての大井川鐵道の姿へ
5. JR 東海・金谷駅周辺地域への人口集中と主要都市への人口流出
6. 新金谷駅のハレとケにおける、日常の簡素な新金谷駅の風景
7. 沿線住民にとって閉鎖的にみえる鐵道会社と物流倉庫の在り方
8. 風化する旧東海道金谷宿の面影と引き継がれる職能や暮らし

例えばこんなコトを考えました →

a. 産業的な効果を上げることで自ずと動き出す鐵道（提案 1、2、3）
b. 忘れかけている上流と下流の新たな交換経済圏の形成（提案 1）
c. 1 集落 1 駅的な流域の現像と普通電車の余白の利用（提案 2、3）
d. 沿線住民が介入できる物流が移動手段への架け橋に（提案 1、2）
e. 気根的な路線集落としての一体性と生業の生産（提案 1、2、3）
f. 金谷町の日常に旅人が参画する地域コミュニティの形成（提案 3）
g. 建築的軸性から住民や旅人が介入し易い隙間を産む（提案 1、3）
h. 体感的な風景の連続性と混同する文化形態の継承（提案 2、3）

←

リサーチから提案へ

流域一体の感覚を持って建築や風景、物流機能を操作すること

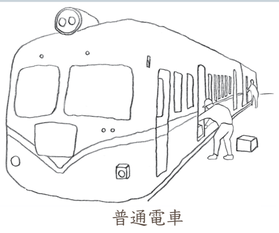
提案 1. 流域スケール　Ⅰ. 移動手段であり輸送手段でもある交換経済圏の再生

大井川モデルの案内

参考：株式会社農業総合研究所

生産者	農産物の生産と収穫 価格決め＆ 売り先の選択 バーコードの発券	最寄駅へ → 移動	各駅	点々と位置する 集落にも対応できる フレームに荷物を 差し込み完了	3 拠点へ → 分荷	直売所	新金谷駅 門出駅 川根温泉笹間渡駅

特徴
- 通常運行の鐵道利用によるコスト削減
- ヒトだけでなくモノも行き来する
- 直売所を 3 箇所に固定したことによるリスク分散



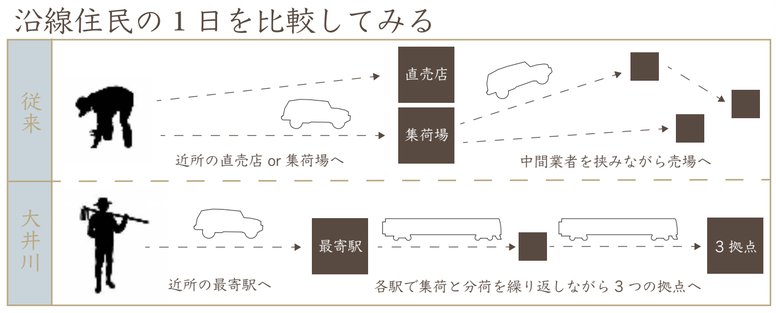
普通電車

Ⅱ. 公共的マージンの対象が沿線住民の暮らしと生業に向けられる

限られたスペースと限られたダイヤのなかでどれだけ豊かな暮らしと生業を展開できるか

沿線住民の 1 日を比較してみる

分散的な移動網が敷かれていた物流に対し、ある程度機能を集約したこと



既存を生かしてこれまでに無い風景を創出する

1. 点在する集落と共に存在する各駅を利用し集荷と分荷の拠点にする
2. 空席の目立つ普通電車の余白に、荷物の乗降場を作る
3. 使われていた貨車を再利用する

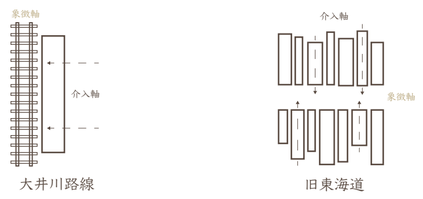
↓

変わらない集落と鐵道が生活の動力へ

提案 2. 集落スケール　Ⅰ. 残されてきた集落の図式から特性を読み取る

軸性（象徴軸・介入軸）

“旧東海道と宿場”、“大井川路線”を図式化すると浮かび上がって見える「　軸性　」に焦点を当てた



東海道は、いわゆる商店街で見られる建築の配列とは異なり、ファサードを直線的に揃える作用は働かない。少しずつズレを持って段々と建築が配列されることにより、道の奥性や地形へと意識が向くような作用を生み出しているのではないかと考える。大井川路線も同様に、象徴的な軌道に対して、各駅が介入していく関係にあるのだ。

軸性を 2 つの要素へと細分化できるのではないか →

街道と軌道：象徴軸

暮らしと生業：介入軸

現地調査から、まちのデザインコードとして見られた 3 要素

1. 曲線的なランドスケープ　2. 無表情な壁の連続　3. 小路

街並みの風景から想像を膨らませてみる

はじまりのトンネル	廃線の記憶	包まれた車両検査庫	流れる音	空っぽな駐車場	ステレオタイプの螺旋	土から生まれて土に帰る
計画地には、運行予定のない車両が視線の妨げとなり敷地内が車側からは見れない状況となっている。このトンネルを機転に、あらゆる視点から楽しめる風景を計画する。	今はもう使われない雑草の生える廃線を人が寄り添える広場に変転させることができるのではないか。計画地から伸びるこの敷地は、周辺地域との見境のない風景を作り出せる要点になり得る。	毎日のように車両検査を行う、生きモノのようにも感じられる SL。しかし、日本で見られる SL の展示方法はどうもモノ感が拭えない。動態保存と静態保存の見境のない状態に目を向けるべきだ。	耳を澄ませば、電車の音が遠くからも聞こえるくらい静かな地域だ。サウンドスケープが自然と街を覆っていることに気付き、音の抜け道についても可能性を見出せそうだ。	駐車場という機能だけ全うする空間はどうももったいなく感じてしまう。始めからいくつかの役割を与えるべきであり、その手段によっては風景が生まれ変わるかもしれない。	SL を見るために、SL に乗るために新金谷に来ている旅人も少なくはないだろう。流域の自然環境と重なることにより風景は固有なものへと移り変わる。建築と風景は環境を作り出せる。	気付けば自分は静岡産のものをよく食べている。自分の体は循環されながらもこの地に由来している流体なのかもしれない。流域に生まれた生活文化は、根源的なところにあるはずだ。

提案 2. 建築スケール　Ⅰ. 混同する文化圏を具体的に表現するためには

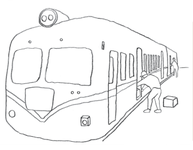
専門性の高い学芸員 ＋ 金谷の特性を知る住民 ＋ 他の文化で育った旅人 ＋ 団体見学で来られる学生

市町の境界線で区切らない、文化の共通認識のもとで形成される共同体を考える

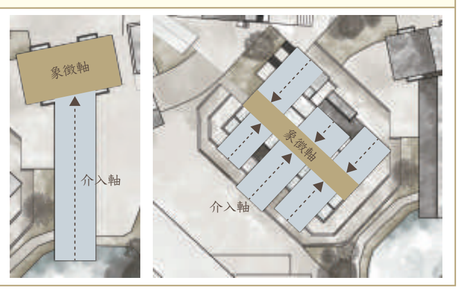
- 市町と異なる単位として文化圏を捉えること
- 世代が変わっても受け継がれていく仕組みを作ること
- いるだけで地域特性が目に入る空間を創出すること

→

- 沿線住民の生活の場でありながら、休日などには旅人も混在するような動線と視覚の交差を作る
- 大井川路線に整体するように置かれる用途（検査庫、流域市場、集荷場など）に対して、商業機能や乗降ロカフェ、食堂、資料館などの住民の生業軸を交差させる
- 抜け感を意識して、風景の重なりや誘惑する景色を作り出すことで、何度来ても違った場を表現する

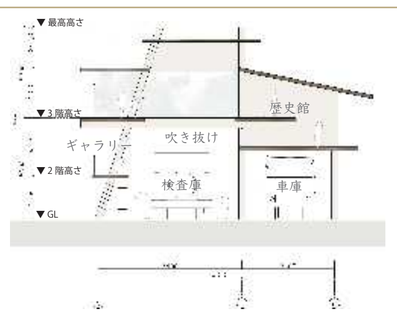


← 時代と共に移り変わる表情（新金谷駅）
引き継がれていく風景（大井川流域）
を作り出せるのではないか

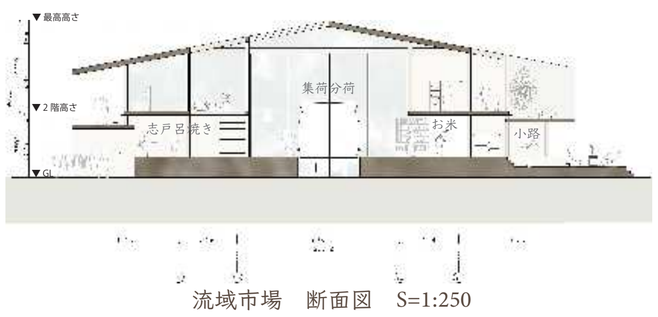


大井川モデル（鐵道と建築が織りなす風景）

例として、2 断面（博物館的車両検査庫、流域市場）

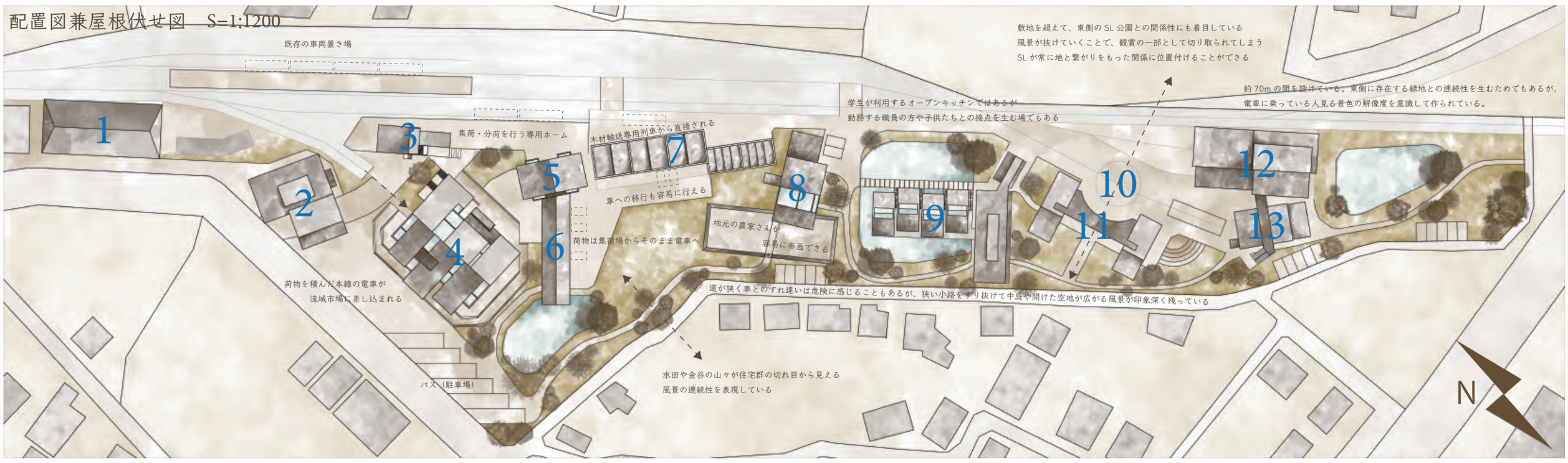


博物館的車両検査庫　断面図　S=1:250



流域市場　断面図　S=1:250

配置図兼屋根伏せ図　S=1:1200



1：新金谷駅、2：エントランス・発券場、3：管理棟、4：流域市場、5：集荷場、6：集荷・分荷場所、7：木材・野菜売り場、8：食堂・農業体験教室、9：ドミトリー・資料館、10：転車台、11：託児所、12：車両検査庫、13：カフェ

模型写真

建築内に電車が挿入され、集荷と分荷を行う。それと同時に、その場で物を売り買いし、飲み食いできる。”働く事は生活する事”を表現した。

食べるものは地元の農家に教えてもらいながら育てる。そして、出来た物を自ら食べる。普通のことでもそれがこの地の生活リズムにある。

ドミトリーからは、毎日のように窓から SL を眺められる。ここでしか体験できない距離感で生活することができる。

敷地外も計画内に入れる。緑地を繋ぎ、風景を重ねる。毎回違った景色を眺めながら生活、または観光する。金谷の特性が自然と目に入り、住民や旅人が共有し合う環境を作っている。

壁を設けない検査車両庫は常時展示空間化する。敷地内外で視点は交差し、見る見られる関係性が生まれた。ファサードのない建築になった。